動機論序説 (1).〔第五回〕

佐野健治

［承前］

3-8　敵情査察を意図して自分からポルフィーリー・ペトローヴィチとの会見に出掛けたラスコーリニコフは，殆ど相手の手の内（自分についての相手の知識）を探ることができず，かえって自分の意識の運動範囲を相手に測定されるという結果となる。帰路彼は彼のところへやってきた犯行現場の住人から正面切って「人殺し」と糾弾される。この段階で，彼の行く先のない行進の挫折は決定的になる。上にその要点を拾ったラスコーリニコフの独白は，犯行動機についての本人の思考が本人の独白として記述されるほとんど唯一の箇所である（エピローグにおいて，ラスコーリニコフの犯行動機の説明が伝えられるのは語り手の口を通してである）。彼は意識した自問自答の形でいわば敗北の脚本を朗読し，その結末で「この俺自身が，殺された虱よりももっと醜悪で，もっとけがらわしいのだ……俺は殺した後になってそのことを自分で自分に言うだろうと，あらかじめ予感していた」という自己の二重性を自らに突き付ける。そして「ああ，ほんとうに，こんな恐ろしさに比較しうるものが何か他にありうるだろうか？　ああ，この俗悪さ！　ああ，この卑劣さ！……」Да разве с этаким ужасом что-нибудь может сравниться! О, пошлость! О, подлость!.. 211 と，自己の行為を徹底的に否定する言葉を自らに浴せかける。この「恐ろしさ」意識は，ラスコーリニコフの明白な意識の一角を占めているのか，それとも出没意識とでもいうべきものなのか，あるいは多重構造の変化し続ける意識の中の，この瞬間正面に向いた一つの主要側面というべきものであるのか――ここではドストエフスキーに

よって書かれた言葉そのものが判定の根拠のすべてである。「こんな恐ろしさ этакий ужас［恐怖，恐ろしく悲惨・不快な・いやなこと，およびその感情］」というものを感じたということは，自己の二重性を映し出した鏡に，彼の目が一瞬注がれたこと，そこから自己嫌悪を引き出したことに外ならない。それはすでに指摘した「深い虚偽の予感」の脈絡の上にある意識であることは間違いない——それがどれほどの深さのところにある意識であるかは別として。［エピローグ 2，また本稿 1-13，3-7 参照］

このようなラスコーリニコフの意識の運動の特徴として，「殺した後になってそのことを自分で自分に言うだろうと，あらかじめ予感していた」という，未来における結果の予測の中に見る現在の自己意識の投影が，もはやそこから逃れられない強迫観念として，再帰的に自己にとりつく。後にソーニャに対して行なう告白で，彼は仮にナポレオンが同じ犯行をした場合，ナポレオンは自分とは反対に全く良心の呵責に悩むということはないであろうと，彼にとってのライヴァルに敗北した屈辱感を表に出す。ここでも注目すべきことは，その敗北による屈辱感を，結果としてではなく，スタートの時から予感している，そして事実結果としてもその通り突き付けられる，というどうしようもなさである。それは，あたかもアリョーナ・イヴァーノヴナの殺害を「服の端を機械の歯車にはさまれ，じりじりと機械の中に巻き込まれていくように」実行したのと対応している。すなわち殺害は自分で止めようと思って止まらない力学的過程であり，その肉体的運動を完了するまで彼は力技を続ける。それに対してこの屈辱感は「おれ自身が，殺された虱よりももっと醜悪で，もっとけがらわしい……殺した後になってそのことを自分で自分に言うだろうとあらかじめ予感して」いて，そして事実，事後になってその通り自分で自分に言うという過程である。この過程は，力学的過程と同様に，彼にとって不気味である。それは，自分の言っていることは果して自分が言っていることか，という疑問ないし不安となって自らにはね返る。そんな恐ろしいことが他にあろうか，とラスコーリニコフは叫ぶ。こうし

て，上述の行為の否定とは，自分の行為に対する倫理的自責の念の発動によって意味を否定するという否定ではなく，行為が，自分の身体および精神において自分の意志によっては制御しえないということである。手が勝手に動くのである。恣意的行動の人でありたいという願望とは反対に，何者かによって強制的に行為をさせられている。これはその意味での自己否定的行為を指す。それは自由の欠落であり，ナポレオン的，プロメテウス的自我の確立を標榜するラスコーリニコフにとっては許しがたい。ここから，ラスコーリニコフは攻撃的な敗北主義者ということができるだろう。

ここで，しかし，ラスコーリニコフの独白の脈絡は，突然，なぜとはなく別の声の脈絡に切り換えられ，ここまでの思考とはいわば反対の極に飛び移る。ぷっつりと切断されて，対極にある別の思考ブロックが演奏を始め，そこでは，無差別に射ち殺す「予言者」の正しさというものが礼讃される。その声は急速に過熱して行き，「おお，絶対に，婆ぁを許すものか！」という激昂の状態へと行き着く。

第四～六部およびエピローグ（印刷稿）に見えるラスコーリニコフの犯行の動機

456 E-1-1 作品を通じて，何らかの様式でラスコーリニコフの犯行動機を説明した語句と文の主なものとして，ラスコーリニコフ本人の独白的思考，ラスコーリニコフの他者への説明（告白），スヴィドリガイロフ，ポルフィーリー・ペトローヴィチその他がラスコーリニコフおよびその他の者に語って聞かせる説明（解説，批評，説得），語り手によるラスコーリニコフの法廷での陳述の要約（地文）等がある。以下，そのあらましについてラスコーリニコフの意識と行動の連関を検討するが，それに先立ってこれらをクロノロジカルな順序に並べると次のようである。

本稿の見出しコード	部章	項　　目	動機の説明コード
3-7	III-7	犯行動機に関するラスコーリニコフの自問自答的思考	
456 E-2-1	IV-4	ラスコーリニコフからソーニャへ犯行動機の説明［その一］	1-1
456 E-4-1	IV-5	ポルフィーリーのラスコーリニコフへの説明［その一］	2-1
456 E-2-2	V-4	ラスコーリニコフからソーニャへ犯行動機の説明［その二］	1-2
456 E-4-2	VI-2	ポルフィーリーからラスコーリニコフへの説明［その二］	2-2
456 E-5-1	VI-3	スヴィドリガイロフとラスコーリニコフとの議論	3-1
456 E-5-2	VI-5	スヴィドリガイロフからドゥーニャへの説明	3-2
456 E-5-3	VI-6	スヴィドリガイロフの独白	3-3
456 E-3-1	VI-7	ラスコーリニコフからドゥーニャへの説明	1-3
456 E-6-1	エピグラフ	動機についてのラスコーリニコフの法廷陳述を語り手が紹介	4-1

456 E-1-2　ラスコーリニコフが直接に自分の口から犯行の動機の説明を他者に行なうのは，もっぱら女性に対して，すなわちソフィヤ・セミョーノヴナ・マルメラードヴァと妹アヴドーチャ・ロマーノヴナに対してである。以下にラスコーリニコフがこれら二人と行なう対話から，彼の犯行動機の記述と構造化を試みるために検討すべき要件を含むと思われる文を書き抜き，その中から問題を取り出してみる。引き続き，同様のことをポルフィーリー・ペトローヴィチおよびスヴィドリガイロフについても試みる。

ソーニャへの犯行動機の説明［その一］

456 E-2-1-1　ソーニャを最初に訪問したとき［IV-4］，ラスコーリニコフは(1). 愛の告白と今後の共同行動の申し出を行ない，(2). ソーニャに対する自分の批評を述べ，(3). 自分の犯行の告白を予告する。犯行の動機と直接関係するのは(3).であるが，それを読む前に彼の思想と信仰の一部を直截に表わ

した言葉をここに(2).から取り出しておきたい。

ラスコーリニコフは「恥ずべき……罪深い女 бесчестная... великая грешница 246」であることを自認するソーニャに対して，自分からもそれを肯定し，つぎのように説明する——「お前が罪深い女だという最大の理由は，ただ無益に自分を殺し，自分を売り渡したことだ。それが恐ろしいことでなくて何だろう！　お前は自分でもそんなに憎んでいる汚辱の中で暮しているばかりか，それと同時に，そんなことをしても誰を助けることにもならない，誰を何から救いだすことにもならないと，ちゃんと自分で知っているじゃないか（そんなことはちょっと目を開けさえすればすぐ分るんだからね)。これが恐ろしいことでなくて何だろう！……一体，お前の中で，そんな恥辱，そんな下劣さと，それとはまるで矛盾対立する神聖な感情とが，どうして同居していられるんだ？　いっそ，いきなり水の中に飛び込んで，一挙にけりをつけてしまうほうが正義に適っているじゃないか」。ラスコーリニコフはソーニャのまなざしを見ただけで，その考えが彼女の中にあることを知る。「たぶん，彼女はもう幾度となく，絶望のあまり，何とかして一挙にけりをつけてしまいたいと真剣に思いめぐらしたことがあるのだろう」と語り手は言う。ラスコーリニコフは未来に向かってソーニャには三つの道があると考える——a. 掘割りに投身する，b. 精神病院に入る，c. 理性をにぶらせ，心を石にする淫蕩な生活に落ちこむ。最後の c.は彼にとって最も嫌悪すべきものであった。しかし，語り手は言う——「彼はすでに懐疑家であった。彼は若く，抽象的であり，したがって残酷だった。それゆえ彼は，最後の道，つまり淫蕩こそが，最も可能性の大きなものであると信じないわけにはいかなかった」と。ラスコーリニコフは引き続きシーソー的な自問自答を経て，c.の可能性の実現を否定する。すなわち，彼女がいままで耐えてこられたのは，この悪徳が彼女にそれほど嫌悪すべきものと思われないという理由によるものだろうか？　いや，違う。彼女を投身から引き止めてきたものは，1. 罪という考え мысль о грехе 248 と，2. 彼女に依存する家族だ。そ

こでラスコーリニコフは，そのような苦行に耐えているソーニャは気が確かなのだろうかという疑問をもつ――「果して彼女はいまノーマルな理性［健全な判断力，思慮，分別，良識］をもっているだろうか？ Разве она в здравом рассудке？ 248」 彼女の態度は，発狂の徴候ではないのか？ これに対するソーニャの答えは彼女の信仰告白であり，これをきっかけとしてラスコーリニコフのキリスト教的信仰との対面が更めて開始されることになる。

456 E-2-1-2 ラスコーリニコフにおいて，ソーニャを犯行者としての自己と同一視しようとする指向と，エリートとしての自己から大衆の一員としてのソーニャを隔絶し，黙殺しようとする指向との，二つの相反する力が同時に働いている。前者は「お前だって同じことをしたんじゃないか，そうだろう？ お前はやはり踏み越えた……踏み越えることができた。お前は生命を滅ぼしたんだ……自分のをね（だからって，何の違いもありゃしない！）」という，いわば「踏み越え」価値をめぐって彼の内部で行なわれる議論の帰結である。後者は，彼の中に，突然，反復して生じ，しかし幻のように消える「ソーニャに対するなにやら毒々しい憎悪の念」［V-4等］，ソーニャへの告白時に覚える「人間が違うんだ」という感覚［V-4］，自首以後とくにシベリヤにおいてソーニャに示す無関心に見られる。けれども，マルメラードフから彼女について話を聞いて以来彼の中に持続し，そしてV-4において恐らくピークに達したラスコーリニコフのソーニャへの恋は，恋そのものの本来の性質の故に，自然発生的であり，それとここに言う二つの相反する指向とは直結しないはずである。とは言え，この恋はやはり他ならぬ二人の所与の条件を背負って進行することは無論である。こうして，ラスコーリニコフがソーニャをくどく文句は，二人の立場が立場だけに深刻かつ絶妙なものとなる。だが他面，それは要するにラブコールであるから，意味が分るようでもあり，分らないようでもあるというコメディである。「……お前は精神と理性によって生きることもできたはずなのに，それがセンナヤ広場で終ろうとしている。Ты могла бы жить духом и разумом, а кончишь на

Сенной... 252 ……でも，お前は耐えきれやしない。もしひとりになってしまったら，僕と同じように，気が狂ってしまう。もう今だって，お前は気違いみたいじゃないか。それならつまり，僕らは共に行くべきなのだ，同じ道を！ 行こうよ！」 なぜ共に行くべきなのかということは，ソーニャならずとも明らかであるとは言えない。ソーニャは理由を問う。彼は言う，a.「物事を真剣に率直に考えるべきときなんだ。いつまでも子供みたいに，神様がお許しにならないなんて，泣きわめいてもしようがない」，b. キリストの似姿である子供たちだが，このような環境では子供が子供ではいられない，わずか七歳で春を売るのも，泥棒するのもいる。c. ではどうすればいいか？「破壊すべきものを破壊することだ，一挙に，最終的に。ただそれだけさ。そして苦悩をわが身に負うんだ！……自由と力を，とくに力を！すべての震えおののく小人ども，すべての蟻塚の上に立つのだ！……これが目的だ！ 覚えておき給え！ これがお前に贈る僕の門出の言葉だよ……」。**456 E-2-1-3** これは，1. 愛の対象たる異性との出会いに際してラスコーリニコフが歌った愛の歌であると同時に，これからの共同行動をほとんど一方的に（しかしソーニャの同意をあてこんで）宣言したものであり，2. ソーニャの朗読したラザロの復活信仰に対して，正面切ってキリスト教的救済への不信，そしてまたキリスト教的教義への不帰依を表明したのであり，3. ナポレオン的超人主義の再確認であり，4. そしてそれら一切が家父長制的な両性関係の中での男性支配的な位置（それは彼の母妹に対する態度に明示されている）からの愛の宣告をも兼ねていた。ラスコーリニコフのキリスト教的救済への不信，そしてまたキリスト教的教義への不帰依は，この長編小説の終末に至っても，それがどう解決されるのかは不明のままである。

ラスコーリニコフは「もし明日，ここへ来たら，その時は誰がリザベータを殺したのかを話しましょう」という予告を残す。

ソーニャへの犯行動機の説明［その二］

456 E-2-2-1 V-4においてラスコーリニコフがソーニャのもとを訪れる目的は，リザヴェータ殺害について告白するためであり，その他ではない。「誰がリザヴェータを殺したのか，それを彼女に明かさなければならなかったのである」。ソーニャの住む家にまでたどりついたときラスコーリニコフが突然に恐怖と無力感に襲われたのは，アリョーナ・イヴァーノヴナを殺害するためにそのドアの前に立った時の状態に酷似する。しかも彼はソーニャに話すことをほんの暫く延ばすことさえできないと感じる。「なぜ延ばすことができないのか，彼はまだ知らなかった。彼はただそう感じたのである。この必然 необходимость 312 に対して自分が無力であるという苦しい自覚に，彼はもう押しひしがれんばかりの思いであった」と語り手は言う。これはドストエフスキーが反復して描いているように，ラスコーリニコフ（つまり人間）の行動が彼の意志によってどこまで，またどのように支配されているのかという自由意志の問題の提起である。また他方，ラスコーリニコフにおいて，これは一体，何のための告白なのかという問に背後から絶えず攻められることを意味する。

こうしてソーニャへの告白もまた「このような打ち明けかたになろうとは，まるきり考えていなかったのに，実際の結果はこのようになってしまったのである」という結末に終る。告白に際してラスコーリニコフに生じた反応の主なものを挙げると，(1). 告白を開始するにあたって，突然，ソーニャにたいするなにやら毒々しい憎悪の念が彼の心を走り，その感覚にわれながら驚く。「彼の目を迎えたのは，苦しいまでの心遣いにみちた，不安げな彼女のまなざしだった。そこには愛があった。彼の憎悪は幻のように消えてしまった。そうではなかったのだ。彼は一つの感情を別の感情と取り違えてしまったのだ。それはただ，あの瞬間が来たということに過ぎなかった」。

(2). ラスコーリニコフは，リザヴェータを殺した男を「たいへん仲の良い

友達 **я с *ним* приятель большой... 315**」と呼び,「その男」は婆さんを殺したかったが,リザヴェータを偶然殺してしまったと言う。ラスコーリニコフはどうしてこんな手のこんだ告白の仕方をするのか? 二人が顔を見詰め合ったまま緊張の時間が経過して最初に音を上げたのは彼の方である――「止してくれ,ソーニャ,沢山だ! 僕を苦しめないでくれ!」 その彼は,誰に対しても弁解の余地のない自己の犯罪事実から,ただひたすらに逃げようとする一介の凡人に過ぎない。ラスコーリニコフは,リザヴェータ殺しという現実に行なった自己の行為に真向かうことができない。彼は事実から逃走する。老婆殺しに関しては,彼は彼の意識の中の老婆というもの,すなわち彼の言う虱と対決して止まなかった(尤も夢の中で彼は殺した老婆から嘲笑され,老婆を殺すこともできなかったという敗北感に沈むというのが,彼の意識下に起こっていることだが)。ところが,彼はリザヴェータ殺しについては,自分にとっての意味を問うという,老婆殺しにおいては反復して行なっていることを,実行しようとせず,ただひたすら直視を避ける。そしてここにもまた,不都合なことを意識せずに済ますという,かの特性[1-13, 3-7, 3-8]が働いて,これ以降リザヴェータの問題は,事実上この小説において立消えになる。アリョーナ・イヴァーノヴナ殺害は,ラスコーリニコフの実生活にとって,実際に手を汚し血の臭いを嗅ぎ衣服に血のりが付くという経験を通して,これらの穢れが彼の神経と肉体を苦しめなかったわけはない。しかし観念的カテゴリーとしての老婆殺害は,そうした穢れとか咎めによって,彼の中のいわばゼウス的正義における観念的位階を変更していない。それは美学的によい形式ではなかったかも知れないという反省を彼にもたらしたに過ぎない。従って老婆殺害は,血のりが乾くとともに,彼の観念の中に占める元の位置に復帰した。リザヴェータ殺害は,しかし彼にとって予想しなかった偶発的な現実であって,元々そのような観念的準備がないのであるから,彼は対処の仕様がない――対処すべきであるかどうかも分からない。それ故に「当然ながら」それは彼の記憶から薄れて行き,消え去るの

みである。とは言え，ラスコーリニコフの全体が，彼の肉体がそれを忘れるわけではない。彼の肉体に連なる精神はむしろ苦しみを増して行き，ついには彼に観念の変更を迫るのである。だがそれは，彼が「一歩一歩と生れ変って行く［エピローグII］」という，この作品の主要なモチーフに属する。

(3). ソーニャは彼を抱きしめて「あなたは，ご自分に対して何ということをなさったのです！」と言って泣く。「もう久しいこと忘れていた感情が，波のように湧き起こって，彼の心をひたし，たちまちのうちに，彼の心を和らげた。彼はそれに逆らおうとはしなかった。涙がふたしずく，彼の目から溢れ出て，睫毛に掛った」。「それじゃ，僕を見捨てないんだね，ソーニャ」と一縷の希望さえ抱いて彼女を見詰めながらラスコーリニコフは言った。(1).は憎悪の感覚と，告白の瞬間が到来したことによる緊張とを，取り違えたという，ラスコーリニコフの感覚についての一つの解説であり，ラスコーリニコフの反射神経の働きを知る上で重要な一項である。(2).と(3).は彼が，他者と接触する感性のレヴェルでは，まことに普通な人間であることを示している。これは彼が観念の世界において強固な，意志を貫ぬく人間としての自画像に描こうとする時の彼とは対照的である。そこにこの作品の情緒的喜劇としての側面を透視できるだろう。

456 E-2-2-2 動機の説明に先立ってラスコーリニコフは「まだ懲役に行きたくないのかもしれない」とソーニャに言って，彼女が「懲役にだって一緒に行くわ」と独り決めしたことに釘を刺す。逆にそれは，彼女の意識に，殺人は何故，どのようにして，何のために行なわれたかという疑問を一瞬にして呼び起こす。ソーニャは「どうしてあなたが，あなたのような人が……そんなことをする気になれたんです？」と問う。この問に対するラスコーリニコフの，何波かの波状に区切られて押し出される答を，以下に，なるべく細かい点まで作品の記述と文脈に忠実に取り出して，ラスコーリニコフの意識における観念的問題を分明なものにするための参考としたい［引用は原文に忠実に行なうことを原則としたが，主として会話体からここでの目的に沿っ

て必要と思われる箇所を引用者の判断に従って摘出したので，見方によっては，小説のコンテクストを何らかの程度歪める結果となる場合もありうることを御断りしておく。なお（　）内は要旨である]。順序はV-4における作品叙述［6-317～324］の流れの通りである。後の照会のために仮に順番の番号を付けた。

動機の説明 1-2-1　(1). 勿論，物を盗るためさ。(2).（ソーニャの問→あなたは飢えていたのね？　お母さんを助けるために？）それほど飢えていなかった。母を助けたかったのは事実だけど，いや……それも，そうとばかりは言えないんだ и это не совсем верно...。（ソーニャは「ああ，神様，そんな真実なんて一体何なんです！ Да неужель, неужель это всё взаправду! Господи, да какая ж это правда! 317 と叫ぶ。これはラスコーリニコフのすべての説明に対するソーニャの抗議でもあり，また変ることのない彼女の思想でもある)。(3).（ソーニャの問→カチェリーナ・イヴァーノヴナに与えたあのお金も？）あの金はそうじゃない。(4). でも，その［奪った］金は……いや，僕は，本当は，あれに金が入っていたかどうかさえ知らないんだが。……あの時，婆さんが首に掛けていた財布を取ったんだ…中略…でも，僕は中を開けても見なかった。そんな暇がなかったんだな，きっと…中略…その品物も財布も，V通りのよその家の中庭に，石の下に，埋めてしまった，次の日の朝……なにもかも，まだあそこにあるさ。(5).（ソーニャの問→何も盗らなかったのに，何故，物を盗るためと言ったのか？）分らない……僕は，まだ決めてないんだ――あの金を取るか取らないか。（ラスコーリニコフは，またしても物思いに沈みながらそれを言ったが，突然，我に返り，一瞬，ちらりと薄笑いを浮べた)。それにしても，これはまた，なんと愚かしいこと глупость 317 を口走ったものだろう，ねえ。（ソーニャは一瞬，「この人は気違いじゃないのか」と考え，すぐさまその考えを捨てた。「いやそうではない，ここには何か別なものがある」。何ひとつ，彼女には分

らなかった！）

動機の説明 1-2-2 (1). ラスコーリニコフは突然，「飢えていたがために殺したにすぎないのだったら，それなら，僕はいま……幸福だったろうよ！ それを知っておいてほしいんだ！」(2). それがお前にとって何なのか……ああ，ソーニャ，一体何のために，僕はこうしてお前のところへやって来たんだろう？ (3). 昨日，一緒に行こうと言ったのは，僕に残されたのはただお前だけだからだ。（ソーニャの問→行く先は？）泥棒をしに行くのでもなければ，人殺しに行くのでもない…中略…僕らは人間が別なんだ Мы люди розные 318 ……やっと今の瞬間になって分った……一緒に行こうと言ったわけはただ一つ，ここへ来たわけもただ一つ，僕を見捨てないでほしいからなんだ。見捨てはしないね，ソーニャ？ (4). でも，どうして俺は彼女に言ってしまったのだろう？……何を言えばいいんだろう？ でも何だって僕を抱きしめたりする？ 僕が重荷を一人じゃ背負いきれなくなって，それを人にも押しつけに来たからかい？ (5). ソーニャ，僕は意地の悪い心を持っているんだ у меня сердце злое 318。それを心に留めておいてくれ。それでいろんな事の説明がつくんだ。僕がやって来たのも，意地が悪いからなんだ。そんな場合，来ない人間だっている。ところが，僕は，臆病者で……卑劣漢だから А я трус и... подлец! 318（うまく話を始めることができない……）。(6). ああ，畜生，人間が別なんだ，僕らは！ 釣り合いやしない。どうしておれはここへ来たんだろう？……われながら断じて許すべからざることだ！ (7).（ソーニャ→いらしてよかったのです。わたしが知っていた方がずっといいわ）。でも実際にそうだったのだから仕方ない！ （ラスコーリニコフは考えがまとまったかのように言った）。僕はナポレオンになりたかったから，だから殺したんだ。……僕はある時自分にこんな問題を出してみた。もしナポレオンが僕の立場にいて，その立身出世への道を踏み出すにあたって……老婆を殺さなければならないとする。さあ，その場合，それ以

外に道はないとしたら，彼はそれを決行しただろうか？（記念碑的ではない，罪深いという理由から）尻込みしたのではないだろうか？……僕はこの『問題』で恐ろしく長いこと苦しみ抜いた。だからある日とうとう，こう気づいたときには，恐ろしく恥かしくなってしまった。つまり彼なら尻込みなどしなかったばかりか，これが記念碑的なことじゃないという考えそのものすら頭に浮べなかったに違いないと。…中略… さあそれで，僕も考え込むのを止めて，絞め殺した……権威ある者の例にならってね……ほんとに，すっかりその通りだったんだ！（ソーニャ→「ずばりと話してくれた方がいい，たとえは抜きにして」と言う。するとラスコーリニコフは間髪を入れず次の説明に移る)。

動機の説明 1-2-3 (1). いまのは何もかもたわ言だ，ただのお喋りも同然なくらいだ！（ラスコーリニコフはここで，母親は無一物，妹は家庭教師をして邸奉公，自分一人に二人の希望がかかっているが，学費が続かず休学，この先もし，うまく行って十年後か二十年後教師か役人になり年俸千ルーブリにありついたとしても，その時母親は老衰，妹はもっとひどいことになっているだろう。二人を葬って，妻子を得ても，いずれまたそれを一片のパンもない有様でこの世に置き去りにすることになるだろう，という自分と家族の現状と未来の悲観的な図を描く)。そこで僕は決心した。婆ぁの金をわが物として，それを，おふくろを苦しめずに最初の数年間を暮すために，大学生活を確保するために，それからまた，卒業後，最初の一歩を踏み出すために，用いようと употребить их 319 ——しかも，そうしたことを何もかも，堂々と，ラジカルにやってのけ，全く新しい出世の道を築き上げる，新しい，独立独歩の道に立つ……さあ，これで全部なのさ……いや勿論，婆さんを殺したことは，まずいことをした это я худо сделал 319 ……でも，もう沢山！ (2). 僕はただの虱を殺しただけじゃないか，ソーニャ，無益で，けがらわしくて，有害な。(と言い終るが早いか，ラスコーリニコフは再び，

間を置かずに次の議論へ転じる)。(ソーニャは抗議する→「そんな真実なんて，一体何なのです！……人間が虱だなんて！」)

動機の説明 1-2-4 (1). いや，そりゃ，僕だって知ってるよ，虱じゃないことぐらいは。…中略… もうずっと前から，僕は嘘をついているんだ……いまのは何もかも違う。お前の言葉は正しいよ。…中略… まるきり別の理由があるんだから，これには！ (2).(唐突な指向の転換が生じ，それが彼を驚かせ，彼に再び活気を与えたかのようだった)。僕は自惚れが強くて，ねたみ深くて，意地悪で，汚らわしくて，復讐心が強くて…中略…狂気の傾きがある。(3). 大学は続けられなくなったと言っただろう。ところが，もしかしたら，続けられたかもしれないんだ。…中略… ところが，僕は意地になってしまった，働きたくなんかなかった…中略…僕は横になって考え事をしている方がよかった。いつもいつも考えてばかりいた……そして，いつもいつも，夢を見ていた，奇妙な夢，いろいろな夢だ。(4). ただその頃になって，僕の心にぼんやり浮ぶようになったことが，もう一つ……いや，そうじゃない！また別のことを話している！ (5). あの頃，いつもこう自問していたんだ。もし他の人間たちが愚かであるのなら，そして，奴らが愚かであることをおれがはっきりと知っているのなら，どうしてこのおれ自身だけでも，より賢明になろうとしないのだろう，おれはどうしてそんなに愚かなのだろう，と。(6).(それからラスコーリニコフは次のことを知ったとソーニャに語る。a. すべての者が賢くなる時など来ない。b. 人間を作り変えることはできない。それが彼らの法則だ。c. 強固な智力と力強い精神を備えた者が彼らを支配する。d. 多くの事を敢えてなしうる者が，正しい。e. より多くの者に唾を吐きかけうる者が彼らの立法者となる)。(ソーニャはこの陰鬱な教理問答 катехизис 321 が彼の信条となり，法となっていることを理解する)。(7). その時僕は見抜いた……力はただ，敢えて身をかがめて，それを掴み取ろうとする者 кто посмеет паклониться и взять ее. にのみ与えられるのだ，

と。…中略… その時，僕の頭に一つの考えが生まれた，生まれて始めて。僕以前には，これまで誰一人として考えついたことのない考えが！　誰一人としてね！　僕には突然，白日のごとく明らかになった。…中略… 僕は……敢えて勇気を出したくなって，それで殺した Я... я захотел *осмелиться* и убил...　敢えて勇気を出したかっただけなんだ，ソーニャ，それが理由のすべてさ！　(8).（ソーニャは激怒して「ああ，お黙りなさい，お黙りなさい。あなたは神様から離れてしまったのです，だから，神様はあなたを懲らしめたのです，悪魔の手にお渡しになったのです」)。(9). ソーニャ，それは僕が暗闇の中に横たわっていて，ああした事が頭に浮んできた時の事だね。あれは，つまり，悪魔が僕をまどわしていたわけだね？　(10).（ソーニャはいっそう激昂して「お黙りなさい！　冷かさないでください，ああ，神様の冒瀆者，何一つ分っていないのです，あなたには！」)

動機の説明 1-2-5　(1).（ラスコーリニコフは直ちに反論して）僕には何もかも分っているんだ。…中略… そんなことは何もかも，どんな細かいところまでも，自分で自分と議論し抜いたんだ，だから，何もかも分っている，何もかも！　(2). 僕は何もかも忘れ果てて，それから新しく始めたいと思ったんだよ，ソーニャ。お喋りは止めたくなったんだ。(3). 僕は賢い人間として出掛けて行った，そして，そのことが僕を破滅させたんだ！　一体僕が知らなかったとでも思っているのかい？（ラスコーリニコフは，a. 自分には力を持つ権利があるかということを自問するのは，自分に力を持つ権利がないからだし，b. 人間が虱であるのは，そういう疑問を持たずに出掛ける者にとってであり，c. ナポレオンなら出掛けて行ったかどうかについて何日も苦しみ抜いた者は，自分がナポレオンではないことをはっきり感じていたわけだ……という議論をする)。(4). 僕はね，ソーニャ，是非論 казуистика 抜きで殺したくなった，自分のために，自分一人だけのために，殺したくなったんだ。(5).（母親を助けるためではない，資金と力を手に入れて人類の恩

人になるために殺したんでもない。僕が誰かの恩人になるか，それともあらゆる人間の生き血を吸うようになるか，そんなことはあの瞬間に僕にとってどっちでもいい事のはずだった)。(6). 肝心なのは，僕が殺した時，必要だったのは，金よりむしろ外の何かだったということだ……いまはそれが何もかも分る。…中略… あの時，僕には知る必要があった，一刻も早く知る必要があった。a. 僕は皆と同じように虱か，それとも人間か？　b. 僕は踏み越えることができるか，できないか？　c. 敢えて身をかがめて摑み取るか，取らないか？　d. 僕は震えおののく小人か，それとも権利を持っているか？　(7). (俄然ソーニャは抗議する，「人を殺す権利を持っているのかどうか？」と)。

動機の説明 1-2-6　(1). あの時は悪魔が僕を引きずって行ったんだが，あとから，奴は僕に説明してくれたわけだ。僕にはあそこへ行く権利などなかった，僕は皆と寸分たがわぬ虱なのだから，と。悪魔の奴，僕を愚弄したわけだ。(2). だから，僕はこうしてお前のところへやって来た！　さ，お客様をもてなしておくれ！　(3). 僕があの時，婆さんのところへ行ったのは，あれは，ただ試してみるために行ったに過ぎなかったんだ……それを知っておいておくれ！

動機の説明 1-2-7　(1). (ソーニャ→「そして，殺してしまったのね！」) (2). でも，どんな風に殺したと思う？　一体あんな具合に人を殺すものだろうか？　(3). 一体，僕はあの婆さんを殺したんだろうか？　僕は自分を殺したんだ，婆さんを殺したんじゃない！　正にあの時，僕はひと思いに自分を使い切った，永久に！ ухлопал себя, навеки!.. 322　(4). あの婆あを殺したのは悪魔だ，僕ではない……。

動機の説明 1-2-8　(1). (ラスコーリニコフは，これからどうしたらいいのだ

ろう，とソーニャに問う。ソーニャは十字路へ行って大地に接吻し，全世界に向ってお辞儀をして，私は人を殺しましたとすべての人に聞こえるように言うように命じる。そして「苦しみを受け，苦しみで贖う，それが必要なんです」と教える)。(2).(ラスコーリニコフは反論する)。a. 奴ら［民衆］に対して，僕に何の罪があるんだ？　何のために行くんだ？　奴らに何を話すんだ？　(3). 奴ら自身，何百万もの人間を滅ぼして，しかも，それを善き行ないと見なしているじゃないか。奴らなんかぺてん師だ，卑劣漢なんだよ，ソーニャ！　行くものか。(4). 第一，何を話すんだい，殺しましたが，お金を取る勇気はありませんでした，石の下に隠しました，と言うのかい？(馬鹿者扱いされるのがおちだ)。(5). 奴らなんか，何一つ分りゃしないんだ，分る資格もない。(6).(ソーニャは必死の思いで繰り返す，「苦しみ抜くことになるのよ」)。

動機の説明 1-2-9　(1).(ラスコーリニコフは最後の力を使って反撃に転じる姿勢を見せる)。僕は，もしかしたら，まだ自分を中傷しているのかも知れない。……もしかしたら，僕はまだ人間で，虱ではないのかも知れない，自分を責めるのを急ぎすぎたのかも知れない……まだ戦うぞ。(2).(ソーニャ「そんな苦しみを背負うなんて！　それも一生ずっと……」)。(3). 慣れるさ。(4). ここへ来たのは，お前に話しておくためだった。僕がいま追われている，捕まりそうになっているってことをね……。(5). 奴ら［警察］なんかに負けやしない。まだこれから戦ってやるんだ。奴らに何ができるものか。(ラスコーリニコフは次のような「情勢判断」のようなものを話す。昨日は危険だったが，今日は少し形勢が良くなった。牢屋に入れられることは確かだ。しかし奴らの手には本当の証拠はないから，すぐ釈放されるだろう)。(6). 牢屋に入れられたら会いに来てくれるか？　(7). 来てくれないほうがいい。

動機の説明 1-2-10　(1).(ソーニャを悲しませたくないために，十字架を受

けとるつもりになって手を差し出す)。(2).(すぐ手を引っこめて)後にした方がいい。

ドゥーニャへの犯行動機の説明

456 E-3-1-1 ラスコーリニコフはネヴァ河のほとりで長時間自殺を企てた後，結局それを断念して自首を選ぶ。母プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナに別れを告げて帰宅すると，妹アヴドーチャ・ロマーノヴナが彼を待ち受けていた。彼はここで，先にソーニャに向かって行なった犯行動機の説明をいわば要約版に直して，ドゥーニャの前で開陳する。その内容を次に掲げる。[VI-7, 399～402]

犯行動機の説明 1-3-1 (1).(ラスコーリニコフはドゥーニャから「兄さんはまだ生きることを信じているのね，本当によかった ты в жизнь еще веруешь: слава богу, слава богу! 399」と言われて)僕は信じてなんかいないが，僕のために祈ってほしいとお母さんに頼んだ。一体これがどういうことなのか，神様だけが知っている。ドゥーネチカ，僕にはこの事態が何一つ理解できない。(2). 何のために[母のところへ]行ったのか，それすら分らないくらいさ。僕はあさましい人間 Я низкий человек 399[低い人間，従って подлец(卑劣漢，下にいる者)と重なる]だよ。(2).(ドゥーニャ「だって苦しみを受けに行くんでしょう?)行くよ，今すぐ。いや，そんな恥辱を逃れるために，水に飛び込んじまいたいと思いもしたんだ。でも水のほとりに立った時，また思った。もし俺がこれまで自分を強い人間と見做してきたのなら，いま恥辱を恐れてどうなるか，とね。……これは，誇り гордость[自信，傲り]だね? (5).(ドゥーニャ「誇りよ」)。(ラスコーリニコフのどんよりとした目に一瞬火花がきらめいたようだった。まだ誇りがあること что он еще торд 399 が嬉しくなったらしい)。(6). お前まさか，僕が水が怖かっただけだと思いはしまいね。(7). もう遅い，時間だ。これからわが身

を引き渡しに行くよ。でも何のために引き渡しに行くのか，それが分らないんだ。

犯行動機の説明 1-3-2 (1).（ドゥーニャは涙を流して「苦しみを受けに行こうとするだけで，もう犯した罪 преступление の半分は洗い流したことになる」と兄を激励する。ラスコーリニコフはこの罪という言葉を聞いて唐突な怒りを破裂させる)。罪？ 罪って，どんな？ あの汚らわしい，有害な虱を，貧乏人の生きた血を吸っていただけの，あの誰にも必要のない婆ぁを，殺せばかえって四十の罪が許されて当然な婆ぁを殺したことをかい？ (2). 僕はそんな罪のことなんか考えない，そんな罪なんか洗い流そうとは思わない。(3). 一体どうして，誰も彼もが，四方八方から『罪だ，罪だ！』と僕を小突きまわすのだ。(4). いまこそ僕には自分の小胆さが馬鹿げたものであることが……こんな無用な恥 этот ненужный стыд を受けるために出掛けると決心した今となって，はっきり分る。(5). 僕が決心したのは，a. 卑劣であり，b. その方が得だからだ（ポルフィーリーが薦めてくれた)。

犯行動機の説明 1-3-3 (1).（ドゥーニャは「血を流したのよ」と反論)。誰も彼も流している血をね。（ラスコーリニコフは流血によって栄冠を授けられ，人類の恩人と呼ばれる例を挙げる)。(2). 僕だって人びとに善をなしたかったのだ。何百何千という善行をなしえたかも知れないんだ。あの一つの愚行 глупость 400 の代りにね。(3). いや，あれは愚行でさえない，ただの不手際な行為 просто неловкости というに過ぎない。(4). あの思想全体は，失敗に終ってしまったいまそう見えるほど愚劣なものでは決してなかったんだから……〈失敗すれば，なんだって愚劣に見えるものさ！〉(5). あの愚行によって，僕は独立独歩の立場に立ちたかっただけだ。最初の一歩を踏み出し，資金を獲得したかっただけだ。そうすれば，一切が帳消しになるはずだった。(6). なにしろ，そんな愚行に比べて，測り知れないほど大きな利益を

もたらすことになったはずだからね……。(7). でも僕は，最初の一歩さえ持ちこたえることができなかった。なぜなら，僕が，卑劣漢だからだ！ (8). それでもやはり，僕はお前たちの目で見ることはしないよ。もし成功さえしていれば，僕は栄冠を授けられただろうに，それが，こうして，罠にはまってしまった。

犯行動機の説明 1-3-4 (1).（ドゥーニャは「それは違うわ」と反対する。ラスコーリニコフは「違う」という言葉を別の意味にとって）形式が違っていたのか，美学的に良い形式ではなかったと言うのか！ (2). でも僕には理解できない。[なぜ正規の軍隊が人間を殺す方が，より尊ぶべき形式なのか？] 美学的に恐れるということは，無力の第一の徴候なんだ！ (3). それを今ほどはっきり自覚したことはない……だからこそ，これまでの何時にもまして，僕の罪なるものを理解できない！ (4). 僕が今ほど力と確信に満ちていたことは，これまでにただの一度もないんだ！

犯行動機の説明 1-3-5 (1).（ラスコーリニコフはしかしドゥーニャの目の中に，彼女が自分ゆえにあまりにも深い大きな苦しみを味わっているのを見る。自分が二人の憐れな女たちを不幸にしたことを感じる）。かわいいドゥーニャ，もし僕に罪があるのなら，許しておくれ。〈もっとも，罪があるなら，許すことなどできないけどね〉。(2).（母親への衝撃について）お母さんは死んでしまうか，さもなきゃ気が狂ってしまうか，どちらかだ。(3). 僕は一生，男らしい，誠実な人間になるよう努力するからね。僕は人殺しには違いないが。(3). お前もそのうちに，僕の名前を聞くことになるかもしれない。お前たちに恥をかかせるようなことはしない。それを証明してみせる……。

犯行動機の説明 1-3-6 (1).（ラスコーリニコフはドゥーニャにかつての許嫁

の肖像画を手渡す)。この娘とはずいぶん話し合った，あの事もね，この娘とだけ。この娘の心に，僕は今になってこんな醜いかたちで実現してしまったことを，いろいろと話して聞かせた。心配しなくてもいい。彼女も同意はしなかったのだから，お前と同じでね。(2). 僕は彼女がもう生きていないことが嬉しい。(3). 肝心なことは，今からすべてが新しい道をたどるということだ，真っ二つに折れてしまう всё теперь пойдет по-новому, переломится надвое 401 ということだ。(4). 僕には，a. その準備ができているだろうか？ b. 僕は自分から進んでそれを望んでいるだろうか？ c. [人は僕の試練のために必要だというが] そんな無意味な試練が何のために必要なんだろう？ d. その必要は，二十年の徒刑後老いと無気力に落ちこんだ時の方が，今僕が自覚しているよりも，よりよく自覚できるようになるとでも言うのか？ (5). それなら何のために生きる必要があるのだ？ なぜ今僕はそんなふうに生きることに同意するのか？ (6). ああ，自分が卑劣漢だということがよく分った，今日，夜明けに，ネヴァ河に立っていた時に！

犯行動機の説明 1-3-7 (1). (ラスコーリニコフは妹と別れてから，心に呟いた)。それにしても，一体どうして彼らはこれほど俺を愛してくれるのだろう，俺にはそうしてもらう値打なんかないかも知れないのに！ (2). もし俺が一人ぽっちで，誰一人俺を愛したりしなかったら，そして，この俺も誰一人決して愛したりしなかったら！ こんなことは何も起こりはしなかっただろうに！ (3). (十五～二十年後俺の心も柔順になるのか，そのために奴らは俺を流刑にしようとしている)。奴らは今通りをぞろぞろ往来しているが，どれもこれも生来腹の底は卑劣漢で強盗なのだ。いや，もっと悪い——白痴だ идиот 401！ もし俺が流刑を免れでもしたら，奴らは皆義憤を感じて騒ぎ立てるだろう все они взбесятся от благородного негодования! 401。ああ，俺は奴らの誰も彼もが憎らしくてたまらない！ (4). (ラスコーリニコフは考え込む→この男が一切の理屈抜きで奴ら全員に対して柔順になってし

まう，ということがありうるものか？　いや，どうしてそうならないはずがあろう？）それ以外にはなりようがないと知っていながら，どうして俺はこうして歩いて行くのだろう？　(5).（この自問は昨夜から数えて百回目だったかも知れない。が，彼はやはり歩き続けた）。

456 E-3-1-2　上掲のラスコーリニコフのソーニャに対する告白の予告［犯行後四日目と思われる］およびその翌日の告白——これを，その数日後［すなわち自首当日］ドゥーニャに対して行なわれる告白とを比較するとき，彼の思考（それは，すなわち強迫的観念を形成する幾流かの異なる，しかし相互に絡みあう思考の流れの複合）が，いくらかの変化を見せてきたことが指摘できるだろう。その変化の中には，彼の観念がではなく，ラスコーリニコフそのもの，ラスコーリニコフ全体が，それまでとは異なる座標軸に依っておのれの姿を見直そうという姿勢をとり始めた，あるいはこれからとり始めようとする前兆が見られるかも知れない。すなわち，そこに見られるのは，彼の心にこれまでとは違う形質をもって運動を始めた愛の働きである［犯行動機の説明 1-2-7］。愛はソーニャによって与えられた。ラスコーリニコフはその与件を，自分が今置かれている脈絡の中で，自分の起死回生を賭ける対象［stake］として，自己の内に同一化させて行く行進を始めるかどうかの岐路に立たされている。彼が岐路に立たされたのは，自らの行為によってそこへ追いつめられたからだが，それとともに，周囲への彼の反応の結果でもある。彼はこの数日の間に，自首に追いつめられるまでの過程で，ポルフィーリー・ペトローヴィチの説得（ここでラスコーリニコフは比較的俯瞰的な目で見た第三者による犯行動機と事件進行の経緯の要約をポルフィーリー・ペトローヴィチから講義され，事件についてより筋道立ったアウトラインを語る術（すべ）を教わっている——彼は今それを踏襲したというわけではないが），スヴィドリガイロフとの論争（それはドゥーニャの介入によって中途半端に終ったとはいえ，ラスコーリニコフは彼の中にニヒリストの終着点を見たはず

である）という経験を経てきた。彼はソーニャに言う――「肝心なことは，今からすべてが新しい道をたどるということだ，真っ二つに折れてしまうということだ」[犯行動機の説明 1-3-6(3).]。彼はここで，思考と経験を通して「一歩一歩と生れ変っていく［エピローグ 2］」行程のスタートの手前の迷路の中で彷徨しているに過ぎない。それは，主体的であるとは言いがたい，他者への告白と自首という行為ではあっても，犯行動機なるものに対する反定立の端初である。